

2021 年度修士論文題目・梗概

伊東深水の「社会画」 ―大正期の画業を中心に―

森田 佑弥

伊東深水(1898～1972)は、大正期から昭和期を代表する美人画の大家であり、浮世絵の流れを汲む最後の画家として、しばしば評価されてきた。本論文は、深水画業の大正期に着目し、従来の固定された彼の芸術について、実作品を基に分析し、近代日本美術史における彼の位置づけを再検討する試みである。

深水の画業を概観すると、最初期の作品は、煌びやかで佳麗な女性を描いた美人画ではなく、社会の奥底を生きる労働者や貧困層の人々を描いた、ある種の社会派とも捉えられるようなものが多い。これら一連の作品群を「社会画」と定義し分析すると、深水は大正時代の様相やその変化を、写真では表現できない人間の感情を捉える感性を持って描き上げ、その時代の流行を絵画の中に如実に反映させていたのである。

また、浮世絵の伝統を継ぐ者としての意識が、彼にあったことは否みがたい事実である。自身の画系を遡ったとき、浮世絵師であるという自負は、彼の念頭から去らないものであったであろう。浮世絵は、浮世——同時代の姿を描くものである。そして、深水にとっての浮世とは、大正時代の社会、それも、華やかな美人のような陽の面だけでなく、下層の労働者たちの日常のような陰の面をも含んでいたであろう。その思いが、大正期の一連の社会画を生み出したのである。

(もりた・ゆうや／文化資源学専修前期博士課程2年)

大岡春卜研究 ―『明朝紫硯』を中心に―

崔 旖

本論文の目的は、18世紀に大坂で活躍した大岡春卜〔延宝八年(1680)～宝暦十三年(1763)〕の画譜『明朝紫硯』の再評価を試みたものである。その過程

で、明末清初の中国版本及び版画から受けた影響、及び、春卜の人物像の特質及び中国絵画受容のあり方についても検討した。

『明朝紫硯』は春卜の美意識を反映した和製画譜であり、当時の日本画壇に与えた影響として、(1)江戸時代の南画及び南画家の発展、養成に寄与し、また『明朝紫硯』に収録されている草花昆虫の画題が江戸時代を通じて人気を博したこと、(2)『明朝紫硯』の典拠の一つであった『芥子園画伝』が和製本として制作される過程にも多大な影響を与え、『芥子園画伝』出版のブームをもたらしたこと、(3)『明朝紫硯』によって合羽摺の技法が普及し、江戸にまで影響を及ぼし、錦絵の先駆と言われるようになったこと、(4)『明朝紫硯』は輸入された明清版画に関する情報を当時の絵師に提供する役割を担い、上方画壇における蘇州版画の受容を推進したこと、の四点を指摘した。さらに、『明朝紫硯』下巻に見られる図像は、明清絵画を通じた西洋画風受容の一例と見なされるべきものである点についても指摘した。

(さい・い／文化資源学専修前期博士課程2年)

ミュージアムの多言語化がもたらすナラティブの変容に関する研究 —大阪歴史博物館近世展示におけるテキストの日英比較を事例として—

石原 淑子

本論文は、ミュージアムの展示解説の多言語化がもたらすナラティブの違いについて、大阪歴史博物館の近世に関する展示解説を事例として取り上げ、分析したものである。研究の背景にあるのは、ミュージアムが日本文化の伝達に果たす役割の重要性に鑑み、多言語化推進のための政策が強化される中における、ミュージアムの実践を分析する必要性の認識である。分析の枠組みとして用いたのは、オーストラリアのメディア・ミュージアム研究者であるラヴェッリが提示する、選択体系機能主義言語学に基づく展示解説の分析手法である。分析の結果、展示解説が部分的に翻訳された場合、展示全体のナラティブがオリジナルのものから変容する場合があることが考察された。これは、外国語解説に頼る来館者は、展示者が意図したものとは異なるメッセージを展示解説から受けとる可能性があることを示唆し、ミュージアムが多言語化を推進するに

あたり、本来伝えたい展示の主題や内容が、外国語の解説においても反映されているかどうかを検証することの必要性を示すものである。

(いしはら・よしこ／文化資源学専修前期博士課程2年)

木版画に表出された天神信仰

虎間 英喜

菅原道真の霊を祀る天神信仰は、その発生から現在に至るまで多様に変化を重ねてきた。江戸時代には学問の神として信仰をあつめ、その姿は板本や木版画に多く見出すことができる。本論文は、そうした天神信仰に係わる板本や木版画に焦点を当て、表出された図像の変遷から、人々が信仰をどのように受容してきたのか、また信仰がどのように変容してきたのか、その実態と過程を明らかにすることを目的としている。その結果、1714年上演の『天神記』以前に、古浄瑠璃における「天神記」の演出に影響を受けたと考えられる『大万寶』（板元：鱗形屋孫兵衛）などが存在し、それらを寺子屋で教材として使用していたことが明らかになった。また江戸時代末期に向かい、現世利益の神としての信仰が高まり、表出されたその姿を礼拝することによって功德が得られるという、信仰の変容も認められた。一方、有職故実家や国学者らは、菅原道真としての新たな図像を模索し、世に出した。しかし、その試みはもろくも崩れ、市中に広まったのは、旧態依然の“天神さま”と天満宮の社殿に坐した“天神さま”の錦絵であったことが明らかになった。

(とらま・ひでき／文化資源学専修前期博士課程2年)